

氏 名 李 昌熙

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1370 号

学位授与の日付 平成 22 年 9 月 30 日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 環朝鮮海峡における粘土帯土器の実年代
－金属器交流の解釈をめぐる前提として－

論文審査委員 主 査 教授 杵山 晋作
教授 藤尾 慎一郎
准教授 坂本 稔
教授 安 在 皓 （東国大学校）
教授 高久 健二 （専修大学）

論文内容の要旨

本論文は、日本列島西半部と韓半島南部を含む環朝鮮海峡地域において金属器の生産と流通が活発化した年代を、炭素 14 年代測定によって求めたものである。

弥生時代の前期から中期にかけての時期、およびそれと併行する韓半島南部の初期鉄器時代には、環朝鮮海峡地域において金属器の生産と流通が活発化する。青銅器や鉄器が両地域で本格的に出現したこの時期、弥生人は韓半島南部に鉄を求めて渡り、初期鉄器時代人は九州北部に渡って青銅器の製作技術や鉄器を伝えた。

従来、こうした交流は樂浪郡の設置を背景に紀元前 2 世紀末に始まると考えられてきたが、2003 年に国立歴史民俗博物館（以下、歴博）が発表したように、弥生時代の開始年代が紀元前 10 世紀に、また弥生中期の開始年代が紀元前 4 世紀までさかのぼるとすれば、こうした交流も紀元前 4 世紀には始まり活発化していたことになる。

この地域における金属器をめぐる交流が始まった時期を紀元前 4 世紀とみるか、紀元前 2 世紀とみるかによって、歴史像は大きく異なってくる。なぜなら、紀元前 4 世紀に始まっていたとすれば、秦・漢が成立する以前に今の遼寧省周辺に存在した燕における鉄の生産体制の枠組みの中で活発化したことになるし、紀元前 2 世紀に始まったとすれば、前漢が匈奴に対してとった鉄政策の枠組みの中で活発化したことになるからである。この違いは、西日本に最初に現れる鉄器が铸造品か鍛造品かといった材質問題やその後の鉄器製作技術など、鉄器の国産化にも影響を与える大きな問題である。

筆者は環朝鮮海峡地域における鉄の問題に深い関心を持っているが、年代が定まらない限りは真の歴史像を復原することはできない。そこで初期鉄器時代の標識である粘土帯土器を対象に炭素 14 年代測定をおこない、当該期の年代を確定することに本博士論文の目的を定めた。年代が定まれば韓国の考古学界が高い関心を寄せている歴博の新年代観の検証も可能である。

韓半島の当核期の実年代を高精度に求めるためには粘土帯土器と弥生土器との細かな併行関係を確定し、それを利用して編年を行うことが不可欠であるが、粘土帯土器は弥生土器に比べて型式学的研究が遅れているため、研究者によって併行関係が微妙にずれているのが現状である。そこでまず、併行関係に関する研究史を検討して、ズレが生じた背景や問題点を抽出し、資料の再検討および新出資料の解析を通じて弥生土器と粘土帯土器との細かい併行関係を確定した。

次に筆者が採取・処理した試料を中心に、炭素 14 年代測定の結果をもとに粘土帯土器の実年代を推定した。対象とした試料は時期比定が確実な粘土帯土器に付着した炭化物、土器との共伴関係が確実なウルシや炭化米、時期が確実で海洋リザーバー効果の影響が少ないと考えられるシカの骨や人骨など、その数は 97 点にのぼる。先に考古学的に確定した環朝鮮海峡地域における併行関係と矛盾のない炭素 14 年代が得られれば新年代観の正しさが証明できるので、あとは弥生土器型式ごとの炭素 14 年代値を参考にしながら、考古学な分析を通じて実年代をさらに絞りこんだ。

最後に以下のような年代観を構築するとともに、韓半島の時代区分の問題点を指摘して改善案を提示した（図 1）。

粘土帯土器のうち、古式に位置づけられる円形粘土帯土器はこれまで紀元前 300 年頃に出現したと考えられてきたが、紀元前 6 世紀ごろに出現した可能性が高まるとともに、紀元前 7 世紀までさかのぼる可能性がいまだ否定できないこともわかった。一方、新式の三角形粘土帯土器はこれまで紀元前 2 世紀に円形粘土帯土器から変化して成立したと考えられてきたが、紀元前 300 年前後には変化していたこともわかった。最終的に粘土

帯土器は紀元後 2 世紀に軟質土器へと変化する。この年代観は併行する弥生土器の実年代とも矛盾しない整合的な値である。この結果、歴博の新年代観の妥当性が検証されたといえる。

確定した粘土帯土器の実年代をもとに、細形銅剣文化は紀元前 5 世紀後半に成立することや、鉄器は紀元前 4 世紀初～中頃に環朝鮮海峡地域に現れることを確認できた。これは従来の考えよりも 100 年以上さかのぼることを意味する。この年代観は墳墓における金属器の副葬のあり方とも一致し、非常に精度の高い年代と考えられる。

そして、本論文で明らかにした粘土帯土器と金属器の新しい実年代は、韓国で現在使われている一般的な時代区分とはあわなくなるので、鉄器の出現を指標に新たな時代区分を設定した。すなわち初期鉄器時代は紀元前 4 世紀初～中頃に始まることになり、円形粘土帯土器の新しい時期に相当する。その結果、鉄器が伴わない円形粘土帯土器の古い部分は初期鉄器時代から外れて青銅器時代に編入され、松菊里式土器から円形粘土帯土器の古い部分へと推移することになる。よって現状で青銅器時代後期とされている松菊里式土器を青銅器時代中期に再編し、円形粘土帯土器の古い部分を後期とした。

しかし課題もまだ残されている。粘土帯土器の実年代はまだ上限と下限年代の目安がついたに過ぎず、その間の細かい年代の推移をおさえきれていないので、今後は細別型式を設定して実年代を付与する必要がある。また、円形粘土帯土器の上限年代も紀元前 7 世紀まで古くなるのかどうかまだ不確定な部分を残している。最低でも弥生土器の水準まで細分型式を設定した上で高精度の実年代を付与したいと考えている。

本論文では鉄器の出現を指標に、初期鉄器時代を円形粘土帯土器の新しい時期からとしたものの、青銅器時代の始まりは依然として青銅器が見つかっていない突帯文土器からとされている。時代区分は同じ論理で行うのが鉄則であるから、青銅器時代の始まりも青銅器の出現を指標に設定するとすれば、現在青銅器時代前期といわれている欣岩里式からとすべきなどの課題もまだ残されている。

将来的にはこの年代観を基礎に、筆者の最終目的である、環朝鮮海峡における鉄器をめぐる交流の実態とその背景の解明に努めることとしたい。

| 実年代 | 九州北部 | 韓半島 | 時代区分 | 実年代 | |
|---------|-------|----------------------|---------|------------------------|-----------------|
| 770 春秋 | 弥生前期 | 板付Ⅱa式 | 青銅器時代 | 600 | |
| 600 | | 松菊里式 | | | 中期 |
| 500 | | 盤鏡里式 水石里式 芳芝里式 | | | 後期 |
| 400 | 板付Ⅱb式 | 円形粘土帶土器 | | | |
| 400 紀元前 | 板付Ⅱc式 | 葛洞 馬田 | 初期鉄器時代 | 400 紀元前 鉄器出現 | |
| 300 | 城ノ越式 | 勒島Ⅰ式 | | 300 紀元前 燕居奈翁の古朝鮮侵入? | |
| 200 | 須玖Ⅰ式 | | | 勒島Ⅱ式 | 200 紀元前 倭漢朝貢 |
| 200 紀元前 | 弥生中期 | 須玖Ⅱ式 | 瓦質土器(古) | 100 紀元前 系土器出現 | |
| 100 | | 高三瀧式 | | 土器 | |
| BC 1 | 弥生後期 | 下大隈式 | 原三国時代 | | BC 1 |
| AD 1 | | 西新式 | | 軟質土器(新) | AD 1 |
| 100 | | | | | |
| 200 | | | | 200 | |

図1 総合編年と新たな時代区分の適用

博士論文の審査結果の要旨

日本列島の弥生時代研究は、その始まりの年代が従来の認識より数百年は遡るという新たなAMS炭素14年代測定結果により年代観の変更を余儀なくされつつある。同時代である韓半島の青銅器時代と初期鉄器時代そして原三国時代の年代研究もその影響を受けている。古代東アジアにおいて新たな歴史の幕開けとなる金属器の交流に関する研究では、中国大陸と日本列島の間に位置する韓半島は重要な位置を占めていて交流の歴史背景抽出に不可欠の地帯であるが、中国考古学と日本考古学の狭間にある韓国考古学としてはまだ両者に生じた認識の誤差を整理できない状況にあった。

この状況下において、李論文は、当該時代の土器を研究対象にして韓半島での編年を再検討し、さらに海を越えて韓半島と日本列島で相互に出土した土器を追跡して両地域における土器編年の併行関係を確定した。さらに、土器に付着した炭化物の年代測定結果と土器の相対編年を対比することによって、韓半島のみならず日本列島とも共通する当該時代土器の較正年代を初めて構築した。その結果は、韓半島における当該時代を再整理して新しい時代区分案を提示するとともに、古代東アジア各地における金属器の導入の歴史的背景を具体的に指摘できる準備を整えたものである。

「はじめに」では、新しいAMS炭素14年代測定による研究が進んで以来、日本列島と韓半島における弥生時代あるいは青銅器時代ないし初期鉄器時代に関するこれまでの年代観が変更されつつある現状から脱却するために、新たな研究が必要となった事情を説明する。目的に向かって単に研究史を総括するという手法ではなく、用語の再整理という視点から問題点を的確に抽出して説明している。

「第一章」では、韓半島で出土する粘土帯土器の型式学的特徴を明らかにして相対編年を確立した。円形粘土帯土器については、標式とされてきた水石里遺跡の土器を再観察して把手製作技法に詳細な検討を加えた結果、過去の理解を再検討しなければならない独自の見解に達した。また、生活遺跡と墳墓出土土器は、製作目的が異なるためか同様の変遷を追えない諸点を指摘した。さらに、円形粘土帯土器使用の後の時期に見られる三角形粘土帯土器の特徴を抽出し、金属器を副葬する墳墓での土器の異同と青銅器・鉄器の関係把握から、土器の相対編年の中で金属器が出現する時期を指摘した。

「第二章」では、韓半島出土の弥生土器や日本列島出土の粘土帯土器を実地に観察し、相互の相対編年のどこに対応するのか把握して、併行関係を的確に指摘した。とくに、韓半島において三角形粘土帯土器の後に出現した瓦質土器が限定した地域でしか使用されていないことや、日本列島出土の粘土帯土器について、古段階である円形粘土帯土器使用時期には北部九州を中心に各遺跡で集中して出土するのに対し、新段階である三角形粘土帯土器使用時期になると出土の範囲は山陰地方まで拡大するもののその量は少ないなど、土器が示す人の移動と文化伝播の背景が時期によっては相違の存在することを示唆した点は注目される。

「第三章」では、自身が分析試料を直接採取し実施したAMS炭素14年代測定データをもとに、韓半島粘土帯土器の較正年代を初めて構築した。また、北部九州を中心とする弥生土器編年との比較を進め、日本列島と韓半島に共通する編年表を作成した。なお、韓半島における鉄器の出現時期は粘土帯土器変遷中の大きな画期とは必ずしも一致しないことが明らかになり、従来とは異なる時代区分案を検討することとなった。

「おわりに」では、韓半島の粘土帯土器に日本列島の弥生土器の年代と矛盾しない年代観を認め、金属器でもとくに鉄器は従来の見解より100年以上早く出現したと指摘し

た。結論として、韓半島における金属器と土器の整合的変遷を示す時代区分には修正すべき点があると指摘した。

このように本論文は、自ら100点に及ぶ粘土帯土器の炭素14年代を測定し粘土帯土器の年代を導き出した点に最大のオリジナル性がある。韓国先史考古学において土器付着炭化物や人骨・獣骨を中心としたAMS炭素14年代測定をおこない、韓半島粘土帯土器の較正年代を初めて構築するなど最先端の研究を推進した。また、九州北部の弥生土器編年と比較して、先行研究における併行関係理解の正しさを自然科学的側面から傍証し、日韓共通の較正年代を初めて構築した。さらに、古代東アジアの人の移動と金属器交流に関する歴史的研究を発展させるための基礎を固めた。以上の諸点は高く評価される。韓半島の粘土帯土器と日本列島の弥生土器に対するさらに詳細な年代研究を今後も進める意欲が充分認められ、かつ、研究の方向性と展望も示されており、今後の研究の進展が期待される。

しかし、韓半島において出現した鉄器の粘土帯土器編年中での時期的位置付けには異論も出ることも、また、それに関連して初期鉄器時代という時代設定およびその区分法については今後もさらに検討すべきこと、などの指摘がなされた。さらに、勒島式土器使用期間の後半に見られる土器の地域色発現についてその歴史的背景を明らかにしていくことが今後の課題であることも指摘された。だが、これらの指摘は、本論文に始まる一連の研究を今後一層充実させるためのものであって、本論文の評価を低めるものではない。

韓半島における粘土帯土器の年代について、古文献に記された事件の年代に依拠することから出発せず、土器付着炭化物や人骨・獣骨などからの試料採取に始まりAMS炭素14年代測定とその解釈に至るまでの作業を通しておこない、円形粘土帯土器と三角形粘土帯土器に関する較正年代を構築したという成果を本論文が有することと、それが日本列島の弥生土器に対する先行研究の年代観の正しさを裏付けたと同時に、環朝鮮海峡地域における初めての日韓共通較正年代構築に貢献したことは明らかであり、本論文は今後の研究の基礎文献になるものと判断される。

本論文の学術的価値は高く、博士の学位授与に充分値するものであると、審査員一同は評価した。

李昌熙氏の提出した論文について公開発表会を8月4日に開催し、口頭による論文審査と口述試験を実施した。氏は論文に関する諮問に対して適切かつ正確な回答をおこない、十分な学力を有していることが確認された。